

とができない。

▽大正10年(1921)

1月・丹波の宿で迎春。そこから東京青木幸太郎宛の賀状。使用のハガキは綾部大本教祖殿と八洲神社の写真版である。

(翌2月、いわゆる第一次大本教事件があったことを考えると奇妙な符合が感じられる。)

4月・「海国少年」(5-4)、少年新詩「口笛」、少年小説「雪崩れ」及び編集後記に短文「四月来たる」。「雪崩れ」は、年頭の丹波での経験を示唆し、厚一の社会感覚を示すものである(うか)。「海国少年」掲載作品にはすべて「順風」の筆名を用いている。以下各号同じ。

この月曲水吟社は、水巴をはじめとして静岡市とその周辺に吟行を試みているが、長頸子は参加していない。(鳥喙子の名前は見える)

5月・「海国少年」(5-5)、少年新詩「母と児の歌」、少年小説「記念日の表彰式」及び編集後記として短文「五月の空」。「母と児の歌」は同誌(5-7)編集後記に、「今度友人が作曲してくれる事になった」とあり、友人とは小田島樹人と思われるが、楽譜未見。

曲水(6-6)へ批評文「木歩氏に伺ふ」を書く。(このはじめに「俳句に遠ざかること二年余り……」とあり、他の理由もあるとしても、「海国少年」との接触及びそれへの傾斜が大正8年春頃からあることを思わせる。静岡吟行不参加もこのあたりに理由が求められよう。

6月・「海国少年」(5-6)、詩「六月の頃」、小説「叔父

の家」、編集後記に「いろいろな事」——この内容は、この年の4月ごろから始まり8月号に至って決定的となったと思われる海国少年社をめぐる紛争のあったことを示唆する)

曲水吟社静岡支部の加藤余石他2氏上京、流觴居に歓迎句会ひらかれ、出席。1句。

7月・「海国少年」(5-7)に少年新詩「かくれんぼ」、少年小説「父を尋ねて」及び編集後記に「時鳥の声」。

8月・「海国少年」の目次内容共に8月号より一変。これまで、現存資料に毎号欠かさず見られた順風の少年詩、少年小説をはじめ樺島勝一の表紙画、グラビアが見当らず、諏訪かげよしの文、挿画もない。編集後記にも順風、羊耳の名前が消え全く別人の記述となっている。にもかかわらず、編集発行人はい



三保海岸に遊ぶ厚

一(大正11年1月)として海野厚一、発行海国少年社であり、これは翌年の同誌(6-11-6-5)(大正11年1月-5月)についても海野厚一の名は消えず、発行所名のみが、住所は同一だが海国少年団と変更されている。

厚一の去就を語るもうひとつの資料として、「曲水」(7-6)(大正11年6月号)の「誰れ彼れ曰」の一部を引用すると、

藤雨曰「顎の下にモチャ／＼と一撮み程の髯を蓄へて一寸新派の敵役じみたのは(長頸子)先生が海国少年社の社長に
なられた頃からださうである。(中略)目下先生は何をして